

子宮頸がん検診における細胞採取器具の検討

(財)福島県保健衛生協会¹⁾, 北福島医療センター婦人科²⁾,
公立大学法人福島県立医科大学医学部産科婦人科学講座³⁾

○塚原 孝(CT)¹⁾, 千葉聖子(CT)¹⁾, 荒木 由佳理(CT)¹⁾, 佐藤美賀子 (CT)¹⁾, 柴田眞一(CT)¹⁾,
菅野 薫(MD)¹⁾, 森村 豊(MD)^{1,2)}, 添田 周(MD)³⁾, 渡辺尚文 (MD)³⁾, 藤森 敬也 (MD)³⁾

【目的】子宮頸がん検診時の直接塗抹標本では、細胞採取器具としてスパーテルもしくはブラシによる細胞採取が推奨されてきたが、未閉経者と閉経者の違いにより、適切な使い分けが求められている。本報告では、本県の現状を把握することを目的として、採取器具別にみた不適正検体の発生状況を調査した。

【対象と方法】平成 22 年 8～9 月の 2 か月間に実施した 115 医療機関の検診受診者 15,216 名を対象とし、未閉経者、閉経者別に、使用採取器具と不適正検体の発生頻度との関連について比較検討した。

【結果】使用採取器具の内訳は、スパーテル 9,208 件(未閉経者 6,160 件、閉経者 3,048 件);60%、頸管ブラシ 3,794 件(1,548 件、2,246 件);24%、綿棒 382 件(303 件、79 件);3%であり、スパーテルの使用頻度が高かった。未閉経者と閉経者との検体不適正率は、スパーテルが未閉経者 1.4%、閉経者 4.5% ($P < 0.05$)、頸管ブラシではそれぞれ 5.6%、1.9% ($P < 0.05$)、綿棒では 4.6%、10.1%であった。いずれの採取器具においても、未閉経者と閉経者との発生率に明らかな差が見られた。もっとも発生率が低かったのは、未閉経者ではスパーテル採取、閉経者では頸管ブラシによる採取であった。

【まとめ】適正な検体を採取するためには、年齢に応じた採取器具の選択が重要であり、未閉経者ではスパーテルを、閉経者に対してはブラシを用いるのがよいと思われた。今回の調査で得られた結果を各医療機関に発信していくことにより、不適正検体の減少を図っていきたい。